

道徳的価値観を広げる道徳授業づくり ～道徳的価値の意義を考える活動を通して～

I はじめに

道徳の教科化にあたって、文部科学省は「考え、議論する」道徳科への転換により児童生徒の道徳性を育むことを打ち出し、道徳教育の抜本的改善と充実を求めた。その背景として、2014年中教審答申「道徳に関わる教育課程の改善等について」において、「心情理解のみに偏った形式的な指導」と「児童生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業」の二つの授業では不十分であることを指摘している。この二つの授業の指摘について、現文部科学省教科調査官の浅見哲也は、「心情理解のみに偏った形式的な指導」を「読み取り道徳」¹⁾と呼び、高宮正貴は「児童生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業」を「忖度道徳」²⁾と呼び、道徳授業のあり方に警鐘を鳴らしている。

また、高宮正貴は「道徳的価値の『意義』についての考え方が『道徳的価値観』」³⁾と述べ、「道徳的価値」と「道徳的価値観」は異なるものとしている。つまり授業では「〇〇はどうして大切なのか」という道徳的価値の意義を理解するための学習を促していく必要がある。そして、生徒が授業において道徳的価値の意義について真剣に考えたことや生徒本人のこれまでの経験や知識に基づく考え方は、生徒の道徳的価値観であるため、教師がその価値観の是非を判断することなく、尊重されなければならない。

そこで本校では、「道徳的価値」の意義について多面的・多角的に考えることを促し、「道徳的価値観」を広げる道徳授業づくりを目指したい。その際「読み取り道徳」や「忖度道徳」にならないよう、物語の主人公の気持ちや考え方に対する生徒の考えをもたせるだけでなく、「道徳的価値」を自分との関わりで考えること（自我関与）によって、道徳的価値の自覚を促すために「道徳的価値観」を広げる学びの場を設定する。「道徳的価値観」を広げる学びの場では、自分とは違う他者の価値に触れるための場をつくったり、生徒に自分とは異なる意見に対して考えさせることで、認知的不協和（自分の認知とは別の矛盾する認知を抱えた状態）を起こすような発問を工夫したりするなど、自分とは異なる多様な考え方に触れる機会を意図的に作ることで、多面的・多角的に考えさせていく。このように「道徳的価値」の意義について多面的・多角的に考えることができれば、授業の終末において「道徳的価値」の意義を再構築するための振り返りを行うことで、「道徳的価値観」を広げていくことが可能になると考える。このような学びを進めていくことで、道徳的価値について「分かりきったことを言わせたり、書かせたりする授業」ではなくなり、生徒は道徳的価値の意義について多面的・多角的に考えることで、学習の前後においてその考えを変化させたり、自分の考えを深化させたりするなど主体性を発揮して学ぶ姿が期待される。これは、本校の研究テーマである「深い学びをデザインする授業づくりー主体性を発揮することを通してー」とも通じる研究であると考えられる。

そこで、「道徳的価値」の意義について多面的・多角的に考える手立てを追究し、「道徳的価値観」を広げる授業を実現することを本研究のねらいとし、研究主題を「道徳的価値観を広げる道徳授業づくり～道徳的価値の意義を考える活動を通して～」として、研究に取り組むこととした。

Ⅱ 研究の概要

1 研究主題の実現に向けて

「中学校学習指導要領」の中で、道徳科の学習は「道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、自己の人間としての生き方について考える学習」と明記されている。ここで改めて、「多面的に考えること」と「多角的に考えること」について考えてみる。

本校では、「多面的に考える」とは、道徳的価値がもつ意味を様々な側面から考えることであり、「多角的に考える」とは、ある道徳的価値や道徳的問題を考える条件や観点の多様性を考えることであると定義する。道徳の授業を通して生徒の道徳的価値観を広げるためには、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、道徳的価値についての理解を深める学習を進めていくことが重要である。

しかし、「多面的・多角的」とは、単に「多様」に考えることではないため、「対話的な学び」として生徒の意見をそのまま受け入れるだけでは、道徳的価値の理解は深まらない。そのため、道徳的価値の肯定的な面だけでなく、否定的な面についても同時に考えさせたり、理想と現実について条件を変えて考えさせたりすることで、道徳的価値観を広げていくことができると考え、その具体的な手立てを次に示す。

(1) 「発問の工夫」

永田繁雄氏は発問の形式を「発問の立ち位置・4区分⁴⁾」として「共感的発問」「分析的発問」「投影的発問」「批判的発問」に分けている。登場人物の心情や考えを問う「共感的発問」や登場人物の判断の根拠や理由などを問う「分析的発問」を中心に授業を展開すると、登場人物の心情理解が目的となり「読み取り道徳」を進めることになってしまうため、心情を問うことによって、道徳的価値の理解に繋がるよう意識する必要がある。登場人物の行為について、自分の心情を問う「投影的発問」や賛否を問う「批判的発問」は、自我関与を進め、主体的な学びを促しやすいと考える。また、高宮氏は「自我関与」を促す発問の工夫として「①『道徳的価値相互の対立や関連』『道徳的価値と反道徳的価値との葛藤』を活用する。②『自分だったらどうする?』と問う。③『自分ならできる?』と問う。④理想的な価値観と現実の価値理解の距離を見つめさせる。⑤あえて『弱さ』に向き合わせる。」⁵⁾ことを挙げている。これらのことから、発問を意図的に使い分けることで、自我関与を促しながら、多面的・多角的に考えさせていくことができると考える。

(2) 「授業構成の工夫」

加藤宣行氏は、導入と終末に同じ発問をすることで、生徒の変化を見とるという授業を構成している。授業は、「①導入で、内容項目の本質的なことを問う。②展開で、内容項目の『お決まりパターンの解釈』を一度崩す。③内容項目を生徒自身の言葉で再構築させる。④終末で、導入と同じ問いをして、どのくらい自分の解釈で言えるようになったかを自己評価させる」⁶⁾ことを提案している。「お決まりパターンの解釈」を作りやすい内容項目では、このような授業展開によって、価値理解を深めていきやすいと考える。

(3) 「見方や考え方を与える資料の提示」

自分とは違う他者の考え方に触れさせる場において、多様な考え方が出されにくいことが予

特別の教科 道徳

想されるとき、価値理解を深めるために新たな見方や考え方を与える資料として提示することで、生徒同士の話し合いに多面的・多角的に考える視点を持たせることができると考える。

これらの手立てを中心として、「道徳的価値」の意義について多面的・多角的に考える手立てを追究し、適切に用いていくことで、主題の達成に向けた実践的研究を行っていく。

2 研究の経緯

(1) 本研究の計画

本研究は、以下のような計画で研究に取り組んでいる。

1年次	・手立ての追究とその提案
2年次	・手立ての改善とその提案、紀要の作成
最終年次	・研究のまとめ、カリキュラムの作成

(2) 1年次のねらいと成果と課題

道徳的価値観を広げる道徳授業の実現へ向けて、道徳的価値の意義について多面的・多角的に考える手立ての有効性を、授業内で書かせる生徒のプリントやロイロノートの記述を基に検証していくことをねらいとした。「発問の工夫」においては、4種類の発問を工夫しながら、仲間と共に話し合い、多様な考え方に触れ、道徳的価値の意義について多面的・多角的に考えることで道徳的価値観が広がった記述が見られた。しかし、「投影的発問」や「批判的発問」などが生徒の自我関与を進め、主体的な学びを促し、それが生徒の道徳的価値観を広げることに繋がったかの検証は不十分であった。

また、「授業構成の工夫」においては、「終末で、導入と同じ問いをして、どのくらい自分の解釈で言えるようになったかを自己評価させる」という工夫ばかりに偏りすぎてしまい、他の工夫についての検証が不十分であった。更に、「努力することは大切である」「正直に生きることは大切である」といったような一般的にそういった考えが「正しい」とされているような道徳的価値については、その道徳的価値の意義について生徒自身の言葉で再構築させ、価値理解を深めていくことは十分にできていなかった。

(3) 2年次のねらい

「発問の工夫」を意識することで、道徳的価値の本質にせまり、道徳的価値の意義の理解ができるようにしていく。特に、投影的発問や批判的発問を中心とした授業の展開とすることで、生徒の自我関与を促し、道徳的価値観が広がったかどうかを検証していく。

また、「授業構成の工夫」においては、導入と終末に同じ問いをすることだけでなく、他の工夫についても検討し、授業の中で実践していくことで価値理解を促していく。特に『お決まりパターンの解釈』を一度崩すことの難しい内容項目について、道徳的価値観が広がったかどうかを検証していく。

特別の教科 道徳

引用文献

- 1) 浅見哲也『道徳教育』明治図書、2018年10月号、68ページ
- 2)、3)、5) 高宮正貴『価値観を広げる道徳授業づくり』北大路書房、2020年、16・28・63ページ、
- 4) 永田茂雄 しなやかな発問を生かして新時代の道徳教育をつくろう『道徳教育』編集部(編)『考え、議論する道徳をつくる新発問パターン大全集』明治図書、2019年、2～5ページ
- 6) 加藤宣行『考え、議論する道徳に変える指導の鉄則50』明治図書、2017年、29ページ

参考文献

- 荒木紀幸『道徳教育はこうすればおもしろい コールバーグ理論とその実践』北大路書房、1988年
- 赤堀博行『道徳的価値の見方・考え方』東洋館出版社、2021年
- 澤田浩一『道徳的諸価値の探究 「考え、議論する」道徳のために』学事出版、2020年
- 荒木寿友、藤澤文『道徳教育はこうすればくもつと>おもしろい』北大路書房、2019年
- 浅見哲也『道徳科 授業構想グランドデザイン』明治図書、2021年
- カント 中山元(訳)『道徳形而上学の基礎づけ』光文社、2012年
- デューイ、J 松野安男(訳)『民主主義と教育(下)』岩波書店、1975年
- ヴィゴツキー、L.S 土井捷三・神谷栄司『発達の最近接領域』の理論—教授・学習過程における子どもの発達』三学出版、2003年